

センタージャーナル

〒460-0016
名古屋市中区橋二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター



10月8日に開催された「東別院子ども報恩講with青少幼年お待ち受け大会」の様相
(写真の無断転用はご遠慮ください)

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・聖典研修 第4回・5回
『教行信証』撰述の願い 2・3
真実の教 二
- ・尾張の真宗史
尾張の真宗法宝物調査
レポート 4・5
一珉光院(名東区)所蔵・
親鸞聖人御影について—
- ・研修報告
教化センター第十三期研
究生 修了報告 その一 6・7
- ・INFORMATION 8

難の中の難 これに過ぎたるはなし

二年半にわたり「センタージャーナル」を休刊しておりました。これまでの教化センター三〇年の歩みを見つめなおし、記念誌を作成する期間に充てさせていただきました。改めて今号より発信してまいりますので、今後ともよろしくお願い致します。

さて、二〇二三年三月二十五日からお勤まりになる「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」に向けて、二〇二二年十月一日・八日に教区・別院の「お待ち受け大会」が開催された。掲載の写真はその時の様子である。この二年半は感染症の影響もあり社会活動が停滞し、今般のような法要やお寺の行事など、行われる機会が減少していた。そして、それは同時に「如來のみ教えを聞くことが困難である」という現実の顕れではないだろうか。このことを積尊は『大無量寿経』流通分に五つの難を挙げて説かれている。(『聖典』八七頁)

五難のうち前三難には共通して、「我らが仏法に聞き学び自己を回復することとは、人間の心がけや努力ぐらいでは容易に出来ない」ということが教示されている。重ねて第四難では、善知識に遇い聞法することが難なのだと言及。

念仏を勧めてくださる人を善知識と尊崇し、学ぶことが難であると説かれていたのだ。自分の無智を知らせてくる眼前の人を善知識としていただくこともなく、逆に遠ざけてきたのがこの私なのである。しかし、それらの四難以上に「この経を聞いて信樂受持することこそ「難きが中に難し」と教示される。「信樂」とは、本願の名号から呼びかけられ願われた如來より賜わる信をさす。日々の勤行や聞法の中で念仏を称え、「本願に帰れ」と呼びかけますことばを聞いていかねばならないと、受け止め継続することが難の中の難なのである。

そして積尊は五難を語り始める直前に「特にこの経を留めて止住すること百歳」と言われる。それは「称えた念仏までをも握りしめようとする自我意を自覚するため、百歳という一生涯を学び、聞き確かめ続けよ」と教えられるとともに、念仏の声を聞いた人によって法が伝燈されることを注意し促しておられる。末法五濁の世であるからこそ、貴方とともに如來の呼びかけを聞く身となるのが今、未來世の一切衆生から問われているのである。

(主幹 荒山 淳)

聖典研修

『教行信証』 撰述の願い

第四回 二〇二〇年一月二〇日
第五回 二〇二〇年九月十四日

真実の教 二

講師 一楽真氏 (大谷大学教授)



コロナウイルスの問題と仏教

新型コロナウイルスの感染が収まらな
い中、「仏教はこの問題に見向きもしてい
ない」と言われたことがあります。ウイ
ルスの退散という対して仏教は無
力という話になりがちです。しかし、役
に立つか立たないかという、私たちの日
頃のものの方そのものを問うことが仏
法の大事な所だと思えます。

現代の日本では、「仏教なんて無くても
生きていける」と言われることが多いか
もしれません。だからこそ、「親鸞聖人は
なぜ生涯をかけて『教行信証』を書き残
していかれたのか」を私たち一人ひとり
が確かめていくことが重要でしょう。と
いうのも、『教行信証』撰述というお仕事
によって、聖人が直接的に評価を受ける
とは考えられません。当時、「ただ念仏一
つで助かる」という教えは弾圧の中にあ
り、それで聖人自身も流罪に遭われたわ
けですから、評価どころか世間からは非
難の対象になっていたのです。それでも
最後まで筆を入れ続けながら書き残して
いくことに生涯をかけられました。この
ような生き様からも、聖人は「何が大事
なのか」ということを、我々に問いかけ
てくださっていると思うのです。

『教行信証』の本文は？

以前私は、『教行信証』は親鸞聖人が真
実に出遇えた慶びを書き残された、感動
の書であり、その教えをいただいた恩
徳に仏弟子として応えんとする、知恩報
徳の書であるとお話ししました。

一方で、『教行信証』が漢文で書かれた
のは、当時の学者、聖道門の人たちにも
この教えの大事さを届けようという思い
が『教行信証』の根っこにあるからです。
私たちは御自釈ばかり優先しようとす
る心を持っています。しかし親鸞聖人は
経論釈を読んで浄土の教えを受け止めて
ほしいということで文類という形を取っ
たのです。かつて安田理深先生は、『教
行信証』は引用文が本文」と言われまし
た。引用を読ませようとして御自釈があ
るのです。引用文は親鸞聖人の独自の受
け止めが調点を通して書かれています。
いちいち返り点と独自の調点をつけて、こ
れはこう読まなければならぬ経文であ
るということを示しているのが『教行信
証』の漢文の大事なことです。

有名などころでは第十八願、本願成就
文の「至心回向」です。回向は衆生側の
行為と読まれるところを、「至心に回向し
たまえり」「至心に回向せしめたまえり」
という最上の敬語をつけて、如来が回向

誰の上にもはたらいています。だから修
行を何年したかとか、知識が多いか少な
いかとか、出家したからとかが在家のまま
だとか一切関係ないのです。そうではな
くて如来のはたらきがあればどこでも
いただいていける世界です。これが如来
の出世本懐の大事なことです。

仏の言わく、「善いかな阿難、問える
ところ甚だ快し。深き智慧、真妙の
弁才を発して、衆生を愍念せんとし
て、この慧義を問えり。」

如来、無蓋の大悲をもって三界を矜
哀したもう。

と、敢えて「如来」と書いてあります。こ
こは、限りのない大悲をもって迷いの世界
を哀れんでいると訳せます。

阿難がなかなか気づいてくれないのと
同じように、私たちも待たれているので
す。だから序分の物語というのは阿難に
起こった出来事ですけれども、私たちも
釈尊をどう見るかが変わらない限り、『大
経』の説法は入ってきます。平等に成
就する道が説かれていることは綺麗事だ
と言ったり、作り話とか、自分と関係
ない話になっていきます。この物語が、あ
なたを救うために法蔵菩薩は願いを發し
たのだと響いてくるかどうかです。

阿彌陀に出遇う

顕真実教の「顕」は、阿難の上に顕か
になったことと言いましたけれども、そ

してくださっていると読まれています。こ
れは読み替えとは言わずに親鸞聖人の
「読み込み・読み取り」だと思えます。こ
う読まなければお経に出遇えないとい
う思いで書いておられるのです。自分の意
見を並べ立てるのではなくて、引用文に
親鸞聖人自身が一番聞いているのが『教
行信証』です。

仏弟子 阿難

阿難は多聞第一と言われる仏弟子です。
釈尊が説法されるときにいつも隣にいま
した。『観経』に「阿難在右」とあり、釈
尊の右におられたわけです。韋提希に対
する説法を全部聞いた阿難が耆闍崛山に
帰ってから、王舎城にいなかった方々に
それを再説したのです。ありとあらゆる
教えを聞いてきた阿難が、『大経』の序分
では、「今日の釈尊はどうなさったのです
か。光り輝き方がいつもと違います」と
たずねます。ただ、釈尊はずっと同じよ
うに光っておられたかもしれません。で
も阿難はその光に気づかなかったのです。
釈尊は阿難が気づかないのに、いきな
り真実教を語られたわけではありません。
親鸞聖人は真実教を「時機純熟の真教」
と表されています。時機が熟し語り出す
ことができる。そこで阿難は、「去來現仏
仏相念」という言葉で過去・未来・
現在の仏はお互いが念じ合う存在なので
すねと申し上げたのです。

過去にもたくさん仏がおられた。現在
もいろいろなところに仏さまがおられる。
そして未来にもたくさん仏が生まれる
れていく。誰もが仏になる法(法則)で
す。その世界を念じている釈尊なのであ
す。

こういう釈尊の一代仏教と、釈尊が一
番おっしゃりたかったことが、どう結び
つくのかという問題を親鸞聖人は「化身
土」に丁寧におっしゃいます。また「正
信偈」では、「如来、世に興出したまうゆ
えは、ただ弥陀本願海を説かんとなり。
(如来所以興出世 唯説弥陀本願海)」と
あります。「ただ」ですから、阿彌陀の本
願、このこと一つを説くために釈尊は世
にお出ましになったといわれます。

もう一箇所確かめておきたいのは、『尊
号真像銘文』の最後に自分の「正信偈」
のお言葉を抜き出して解説を加えている
ことです。『大経』の仏道に自分も繋がっ
ているということを押さえておきたいと
いうお心があると思います。この流れの
上に預かることができたとする慶びをも
ってこの言葉があるわけです。「正信偈」
の文章を「本願名号正定業」から「即横
超截五惡趣」まで引かれています。

如来所以興出世」というのは、諸仏の
世にいでたまうゆえはともうすみの
りなり。

（『聖典』五三二頁）

ここに「如来」は諸仏と明確に書いていま
す。だから釈尊だけではなく、あらゆる如
來がこの世にお出ましになった理由を述べ
る言葉です。それを受けて、

唯説弥陀本願海」ともうすは、諸仏
の世にいでたまう本懐は、ひとえに
弥陀の願海一乗のみのりをとかとん
なり。

と、阿彌陀の本願海をここでは「願海一
乗」と言っています。だから本当はここは
詳しくは「唯説弥陀願海一乗」と書きたい

ると阿難は初めて分かったのです。だか
ら阿難からすれば上下関係で釈尊と自分
を見ていましたので、釈尊が阿難のこ
を未来の仏と見られていたことにびっく
りしたのではないかと思います。

でもいつの間にか仏教は阿難がそうで
あったように、悟った人から悟れない人
までのランク付けをしていくようになり
ました。これは阿難だけの話ではありま
せん。私たちもやはり修行をした人が仏
になるのだと考えます。阿難は私たち
の代表なのです。すべて段階的にランク
アップしていくとしか見られないのが私
たちかもしれません。

そこからすると一番領けないのが誰も
が平等に仏になる世界です。そこに釈尊
は生きておられたのですねと、過去・未
來・現在の仏は「仏相念」、お互いが念
じ合う存在なのです。阿難が気づいた
たものだから、よく気がついたと言っ
て説法を始めたのです。

釈尊は本当に阿難自身の問いなのかと
いうことを確かめ、そして阿難は、私は
見たままを申し上げたのですと言ったら
それは一切衆生を救うような問いだと言
います。そして加えて私もそのためにこ
の世に現れたと、如来の出世本懐である
と仰うのです。

この「如来」という言葉がとても大
事で、誰にでも成り立つ法則に目覚めた
そこが我々のために来てくださっている
存在なのです。仏の境地まで上りつめて
いくと、とらえがちなのですが、親鸞聖
人の仏教は如の世界がこちら側に届いて
くる教えでしょう。南無阿彌陀仏として
届いています。どこにでも届いています。

のです。実際坂東本「正信偈」にはここに
修正の跡が見られます。しかし七文字にし
ないといけませんので、どうしてもやむを
得ず削られた言葉もあるということです。
「弥陀の願海一乗のみのり」これを説いた
ののだといっているのです。次いで『大経』
の出世本懐の文章を引いています。

しかれば、『大経』には、「如来所以
興出於世 欲拯群萌 惠以真実之
利」とときたまえり。如来所以興出
於世は、如来ともうすは、諸仏とも
うすなり。

と、どこまでも如来を諸仏と言います。親
鸞聖人の当時、仏教といえは釈尊の説法、
これを中心にみんなが見ています。しかし
釈尊のお心は何かと違った時に、釈尊
だけではなくてありとあらゆる仏さまの根
っこにあるのは何かを言われています。現
代は、どの仏さまにご利益があるかとい
って比べています。でもどの仏さまでも願
いは一つですよと言っているのです。これ
が親鸞聖人の言いたいことなのです。

でもそれは宗派の話ではありません。他
の宗派を説き伏せてそこにみんなを入れ
込もうとするのではなくて、仏教とは何
かと言え、どの仏さまも我々が苦しみ
傷つけ合うことを超える法に出遇ってほ
しいということです。誰もが仏になる法
を伝えたい。その道に阿難が気づくこと
ができたようにです。

【文責編集部】

の史
張宗
尾真

尾張の真宗法宝物調査レポート

— 珉光院（名東区）所蔵・親鸞聖人御影について —

小島 智

新型コロナウイルス感染症の蔓延によって、真宗史資料調査もままならない状況にあるが、その中でも調査させていただいた法宝物が若干ある。名古屋市長東区の珉光院に所蔵される親鸞聖人御影もその一つであり、旧蓮如上人研究班スタッフからの情報により存在を知ることができたものである。また同院には、宗祖の生前の姿を描いた寿像として名高い安城（静）御影の模写本も伝存しており、併せて紹介させていただきたい。

(1) 親鸞聖人御影（絹本着色）縦九一・七×横五二・三 cm 二〇二〇年九月五日 調査



同 教如上人裏書（紙本墨書） 縦七〇・三×横三五・四 cm



大谷本願寺釋教如（花押）
慶長二訂年五月
尾州海東郡 萱津圓通寺
常住物也
願主釋秀頓

外箱の表書にあるように、箸尾教行寺に伝わった「安靜御影」の模写である。本紙と表装裂に分けることなく、一枚の絹地に本紙以外の部分まで描いた描表具と呼ばれる手法が用いられている。

さて、箸尾教行寺の「安靜御影」について次のことを確認しておかなければならない。つまり文明十一（一四七九）年、本願寺第八代・蓮如上人は、三河国碧海郡安城に伝来した親鸞聖人八三歳「建長七（一二五五）年」の寿像と伝える「安城御影」（正本）を修復し、副本二幅を制作する。そして、一幅を造営中の山科本願寺に安置し、もう一幅を自身が開創した撰津国富田の教行寺に置いたというのである^②。その後、教行寺は寺基を、大和国広瀬郡佐味田村を経て同国十市郡田原本村に移し、さらに承応二（一六五三）年、同国広瀬郡箸尾村（現奈良県北葛城郡安城町）の現地へ移転するにあたって、富田の旧坊を別坊とする^③。

ただ残念ながら、教行寺伝来の御影副本は明治中頃に真宗大谷派寺務所内事局に預け置きとなった後、現在は所在不明となっており^④。しかし幕末^⑤、復古大和絵の絵師として著名な冷泉為恭によって模写本が制作されたことが知られており、古くは日下無倫氏が紹介しているのである^⑥。日下氏によれば、東本願寺枳殻邸内の燕申堂に収蔵される一本、現石川県白山市（旧松任市）・本誓寺蔵の一本、同じく石川県加賀市・西栄寺蔵の一本がそれであるとい、本誓寺本の裏には次のような識語があるという。

爰ニ安政五年戊午三月教行寺御影貫主上人御覽御所望ニテ岡田式部少丞為恭ニ模写仰付ラレ、燕申堂（枳殻邸ノ仏壇）へ御収蔵アリシトキ、教行寺モ同ク摸本ヲ作ラレケル。本誓寺ハ有縁ノ事ナレハトテ一本ヲ乞テ法宝トスルシカリ^⑦

教如上人下付の親鸞聖人御影である。写真からは分かりにくいですが、教如上人により、表面上部に「観彼如来本願力」以下四行の『入出二門偈頌』の賛文が、また向かって左脇に「和朝親鸞聖人」の銘が記されている。

周知のように、教如上人は文禄元（一五九二）年十一月、本願寺を継承し第十二代住持となるが、翌年閏九月に豊臣秀吉によって退隠させられ、弟の准如上人が住持職を継承する。しかし、その後も本願寺住持職としての活動は続け、それが教如教団の形成となり、さらに慶長七（一六〇二）年、徳川家康から京都烏丸六条の寺地寄進を受けると、翌年には親鸞聖人御真影（木像）を迎えて東本願寺を創立するに至るのである。この退隠後の教如教団形成を物語る歴史資料として注目されるのが、文禄二年から慶長七年までに教如上人より下付された本尊・御影・

(2) 箸尾教行寺旧蔵「安靜御影」模写（絹本着色）
縦一一四・八×横三八・〇 cm（表具全体縦一六五・〇×横四九・四 cm）
二〇二二年一〇月二〇日 調査



同 外箱表書写真



蔵される模写本であり、平成二二（二〇一〇）年に愛知県の安城市歴史博物館で開催された「安城御影」展で、本誓寺本とともに出陳されているのである。同展図録掲載の写真を見ると^⑧、願正寺本が画像部分の輪郭の体裁をやや異にする以外は極めてよく似ており、巻末解説でも落款はなく伝来についても不詳だが、画像に加え上下賛の筆跡も本誓寺本に共通し、大きさもほぼ同じであることから、冷泉為恭模写と推測されているのである^⑩。重ねて同解説では、円光寺本が修復される前は本誓寺本と同一の表具であったと紹介されており、恐らくこれも描表具であったと思われる（願正寺本については記載がなく不明）。

以上のことを踏まえ珉光院模写本を改めて見ると、これも落款・添状等がなく、寺側に何の伝承もないようであるが、上下賛を含めた全体像は本誓寺本と同様である。大きさも本誓寺本「縦一一五・五×横三六・〇 cm（表具全体縦一七一・〇×横四九・九四 cm）」^⑪とほぼ同じで、描表具の図柄は異なるものの、賛文の筆跡は一致している。絵絹などからは幕末の制作と推測され、冷泉為恭模写としてもよいのではないかと考えるが、筆者の専門とするところではないので断定は控えたい。ただし、復古大和絵の優品であり、教行寺旧蔵副本とともに、枳殻邸収蔵模写本までもが所在不明となっている現状において^⑫、貴重な法宝物であることは間違いない。加えて、同系統の模写本が他にも存在する可能性があることも、教行寺の幕末の事情から指摘できるところであろう。

なお、「安城」と「安静」の表記の問題であるが、近年は三河安城での伝来を重視し「安城」と表記するのが通常である。しかし、教行寺での伝承は「安静」であり、山号も「安静山」と称されているこ

聖教であり、本願寺住持職としての自覚を示すものと言える。

さて、本御影も教如上人の裏書から、慶長二（一五九七）年に尾張国海東郡の萱津圓通寺に下付されたものであることが見て取れる。圓通寺は珉光院の元々の寺号であり、その後、江戸前期の第十四代住職從盛の院号を寺号にしたという^⑬。教如上人退隠時の、尾張地域での教団形成を示す重要な法宝物であるが、旧蓮如上人研究班の調査では確認されていなかった。そのため、『真宗大谷派名古屋教区教化センター研究報告』第四集（蓮如上人と尾張、二〇〇〇年）にも掲載されていなかったが、ここで、教如上人退隠時下付と断定できる親鸞聖人御影として、改めて報告する次第である。

*本御影の調査は、旧蓮如上人研究班スタッフの成瀬元・井川芳治両氏よりご教示いただき、合同で行っていることをお断りいたします。

とを最後に申し述べておきたい^⑭。

*本報告執筆にあたり、教行寺住職の富田英見氏と宗務所内事部の山口昭彦氏より、資料提供ならびにご助言をいただきました。ここに深甚の謝意を表します。

① 『名古屋別院史 通史編』（真宗大谷派名古屋別院、一九九〇年）第一章第二節参照。
② 『真宗重宝聚英』第四卷（同朋舎出版、一九八八年）六、一〇頁。
③ 上場顕雄「近世真宗教団論」〔同著「近世真宗教団と都市寺院」（法藏館、一九九九年）所収〕および「真宗新辞典」（法藏館、一九八三年）参照。
④ 教行寺住職・富田英見氏からのご教示による。
⑤ 日下無倫「真宗史の研究」（平楽寺書店、一九三一年）第一編第六部「親鸞聖人寿像の研究」参照。
⑥ 註⑤書二六頁。
⑦ 註②書一四、五頁。なお本誓寺蔵護とは、安政三（一八五六）年に本誓寺を継職した松本白華のことと思われる『真宗人名辞典』（法藏館、一九九九年）参照。
⑧ 註④に同じ。
⑨ 『特別展 親鸞聖人像の原点 安城御影』（安城市歴史博物館、二〇一〇年）五八―六一頁。なお豊田市・願正寺本については、それ以前に織田顕信氏が、「安城御影」摸本成立と祖師信仰」〔同著「真宗教団史の基礎的研究」（法藏館、二〇〇八年）所収〕にて紹介している。ただし、写真の掲載はない。
⑩ 註⑨「安城御影」所収「総説 安城御影の原点と展開」参照。
⑪ 註②書一四頁。
⑫ 註⑨「安城御影」五九頁。
⑬ 註④に同じ。またこれについて、蓮如上人の孫である顕誓が記した「反古裏書」〔永禄十一（一五六八）年〕に、「世間申伝へ侍ハ、和讃御所作ヲナサレ御歡悦ノ御カタチヲウツサセラレ侍ル」〔真宗史料集成〕第二卷（同朋舎出版、一九八三年）七四三頁〕とあることにも注目される。

研修報告

教化センター第十三期研究生
修了報告 その一

二〇二二年六月二十七日、教化センター第十三期研究生が修了した。新型コロナウイルス感染症が広がり、学習会の中止や延期をせざるを得ないことも多い中、第十三期生は学び続けた。修了式では各自、研究生として歩む中で学んだこと、調べたこと、感じたことなどを自由に報告する機会を設けた。今号では、その報告の一部を掲載させていただきます。

母の実家が曹洞宗に所属していたこともあり、私は木魚のリズムに合わせてお勤めされる『般若心経』をよく聞いていました。一方、私の父の家は真宗大谷派の門徒ですから、家では『正信偈』がお勤めされていました。この影響もあってか、物心ついた時には、禅宗系の教えや真宗に関する本を読んでいました。そういった様々な教えが合わさり、両親が大切にしていたものを受け継いで、今の私がある。このような私の背景を最近よく考えます。

私は「証巻」に引かれる「阿修羅の琴」の教えを大切にしています。心に何かつつかえることがあった時、この段を読み、胸がスッキリするように感じることもあります。そういった心に響く言葉を皆さんも見つけておられるのだなど、座談会で色々聞かせていただきました。

三年間の研究生期間を経て、自分が何か変わったかどうかは分かりません。ただ、今までは大事な荷物がリュックの中にあると思いき、それを一生懸命背負ってきた自分であったと思います。それをこの三年間の中、荷物を一つ一つ下ろして

段々と身軽になってきているような感じがしています。

伊藤 小百合

仏法の学びには解学と行学があると言われますが、私はこれまで解学ばかりでした。『正信偈』の用語などを理解することが仏教の学びだと思っていました。ある時、先輩から「あなたは仏教を対象化して見ている」と指摘されましたが、あまり気にしていませんでした。

研究生として『大無量寿経』『三毒五悪段』を学ぶ中、私の心が見事に見られているように感じました。その部分において、釈尊は弥勒菩薩に「この世の人々は皆、思いやりなく自分の幸せだけを追求存在だ」と言われます。人生の壁、迷い道、そこにいる自分の姿が見えていないと知らされました。

私はそんな私に、衣服を整えて威儀を正し、阿弥陀如来の御名を聞き、「南無阿弥陀仏」と称する道を示されます。しかし私の過去の経験から、未だに心の霧は消えません。今の心境は「ぬれながらなお雨待つ カエルかな」です。ですから

求めてしまうのが我々なのだ」とも、宗祖は示していると思います。
貝沼 樹

お朝事で『御文』を繰り返し読みする中、「蓮如上人はどのようにして生老病死と向き合ったのか」ということが気になりました。それで蓮如上人について調べてきたのですが、一番気になったのは、その御生涯に多くの方との死別が見られることです。上人は五度の結婚をしています。また二十七人の子がいますが、七人の子に先立たれています。上人が生きた時代社会では飢饉や疾病も多く、何万という方々が亡くなっています。『御文』には、「無常のかげ」「ゆめまぼろし」「はかなき」など、人間の生が無常であることを感じさせる語句も多く見られます。死が身近にあったからこそ、そのことを様々な方に伝え、問うていたと思います。

河本 俊文

私は研究生応募のレポートに「死ぬことが怖い」と書きました。仏教を学べば、死の恐怖が無くなると思っていました。このことは座談会などで何度か話しました。研究生になって『真宗聖典』を初めて開き、お釈迦様や親鸞聖人のことを学び、自



研究生奉仕団 (2022年5月)

分自身の欲を見つめ直すこともでき、とても新鮮な思いがしました。しかし、死の恐怖は無くならないし、たぶんずっと無くならないだろうと今は思います。学習会の中で強く印象に残っているのが「いのちが私の中で生きている」という言葉です。いのちは私のものでなく、いたものだもの、尽きるまで怖がらず生きようと思えました。

木村 幸夫

死の恐怖について、私は家族にも、誰にも話したことがありませんでした。話すようなことでもないと思っていました。しかし座談会で他の研究生に聞いてもらい、その恐怖は少し和らいだように思います。私がいつか余命宣告を受けた時には、研究生をはじめ、先生やスタッフの皆さんのお寺に行き、そのことを話したいと思います。話せる人がこんなに多くいることがとても嬉しいのです。

ら早く「飛び込んで 浮かぶ他力の カエルかな」、つまり自力を捨て救われた姿に近付きたいと思います。

大島 善信

「研究生」という名前にワクワクし、どんなことが学べるかと期待を膨らませた初日。しかし、長年仏教を学び幅広い知識を持つ方々も参加されており、何を言っても良いか分からず、座談会では自分の殻に閉じこもってしまうことが多々ありました。発言できない自分はどうやって、この貴重な場を活用すべきか思案した時期もあります。しかし、座談会の中、他の研究生の葛藤や人間模様などを一緒に考え、意見を共有できたことは、自分にとって貴重な財産になりました。三十年間仕事をしてきた中、私は「出来ない」とは無い、知らないことは無い」という自信を持っていました。しかし、研究生の日々を通して、プライドに執着する傲慢を絵に描いたような人間になっていたと今更ながら気づきました。その自信が見事に崩れ良かったと思います。

学習会の中、『観無量寿経』を学ぶ時間がありました。私はこの仏典が一番好きです。「王舎城の悲劇」はどうして起きてしまったのか。絆で結ばれている家庭生活の中で、どうして親子の争いは起きるのか。この問題は、私自身の現実に直結する問いでした。

大橋 眞佐子

私は「自分が僧侶として行っていることに意味があるとは思えない」という疑問を抱えています。これは自分の「信」に関わる問題だと思います。僧侶として活動するということは、勸化をする(救

三年前に教化センター研究生募集のお知らせを見て、どんな学びをするのか、共に学ぶ人たちはどんな人たちなのか、興味を持って申し込みました。参加した皆さんの、自信を持って発言される姿に圧倒され、私は自分の身の置き場所を間違えたのではないかと思いつつ参加しました。しかし、家庭の事情で参加することも難しくなり、そこに新型コロナ感染症の流行も重なり、思うように学べないままに修了を迎えることになりました。

寶池 美智代

私は「どれだけ多くの人と出会うことができるか」を人生の一つの目標とすると共に、楽しみにしています。この研究生の中で、どこまで皆さんと関われたかは分かりません。しかし、どこかでお会い出来たら声をかけてください。私もお声をかけさせてもらいます。

研究生の学びから、公開講座等を受講するだけでは得られない気づきをいただいたと思います。私は最近、念仏は信仰告白なのではないかと考えています。表現として不十分かもしれないが、少なくとも「南無阿弥陀仏」は呪文ではないのだと学習を通して気づかされました。このように信仰を考えるようになったもう一つのきっかけとして、日蓮正宗の友人との対話があります。彼はしばしば「信仰は正しい。道理」に基づいていなければならぬ」と口に、私は「信仰は、道理を超えたものだ。後から屁理屈を付けて、道理」と言っているだけで、それは「計らい」だろう」と言い、相容れません。互いに自分の道理(枠組み)の中で主張し合い、議論が噛み合っていないとも思います。けれど、互いが自分の信

濟を提供する)立場に立つという側面を持つています。仏教は個人の救済を約束しますが、その救済は実感できません。だからこそ、自分が何を求めているのか分からなくなってしまう。結果、やっていることの意味を実感する際には、所属する門徒の数やお布施の額などをその基準にしてしまっているのではないかと思うのです。

「真仏土巻」には「如来すなわちこれ虚無なり」と説かれます。また宗祖も和讃などで仏を「難思議」と讃えています。つまり、仏(我々が求めるもの)は我々には意味化できない、もしくは意味の固定化を嫌っているということなのだと思います。ということは、実感として意味があると思えないということ、至極まっとうなことであり、無理に意味を付ける必要は無いと思います。しかし「意味を



第十三期生修了式 (2022年6月)

仰を確かめるという点も含め、友人とはこの勝手な議論を楽しんでいます。聞法を続けていけば、議論を超えた妙好人のような純粋な信仰の境地に至ることができるとも思いません。理屈を弄んでは無理だという気がします。ただ、そこに近づけるように、これからも学び続けたいと思います。

橋本 有司

宗祖が「正信偈」に表された仏の願いを受け止めたいと思い、研究生の三年間で『無量寿経』『浄土論』『論註』『入出二門偈』と読み進めてきました。これらの聖教を通して、私は何を気付きとして受け取ったのか。思うに、阿弥陀とは、釈迦を中心とした多くの諸仏と言われる人々や、釈迦を救主と信じた人々が長い年月をかけて見出した真理なのではないでしょうか。その阿弥陀が自利他行を成就され、私たちはその功德を回向される。それを他力と言うのだと思います。しかもその功德は常時用意されているのに、受け取り側の機が不十分で受け取れない不相应が起きているというのが、現在の私たち一人ひとりの状況ではないでしょうか。私は宗祖の教えを通して、真理に一步一步近づきたいと思っています。

今の私には「教え」を通して、確実に得たものは無いかもしれませんが、「念仏を称えることに有難さを感じる私がいる。名号を称えることによって不可思議光を信じる私がいる」ということは事実としてあります。これからの日々も仏のおはからいのままに生活していきたいと思っています。

高橋 律子

2021年度研修業務報告

◆2021年度聖典研修

テーマ 「南無阿弥陀仏」

宗祖親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年慶讃法要を迎えるに当たり、「南無阿弥陀仏」をテーマに、仏教学、真宗学、歴史学など、様々な視点から講義をいただきました。

- ① 2021年 9月14日(火) 福田 琢 氏(同朋大学教授)
- ② 2021年11月 2日(火) 織田 顕祐 氏(同朋大学特任教授)
- ③ 2022年 1月18日(火) 鶴見 晃 氏(同朋大学教授)
- ④ 2022年 3月 7日(月) 蒲池 勢至 氏(同朋大学特任教授)
- ⑤ 2022年 5月16日(月) 市野 智行 氏(同朋大学専任講師)
- ⑥ 2022年 6月17日(金) 安藤 弥 氏(同朋大学教授)

◆2021年度特別講座「真宗儀式の教相」

テーマ 「得度式をめぐって」

2021年12月1日(水) 竹橋 太 氏(真宗大谷派儀式指導研究所 研究員)

◆第13期研究生修了 (2019.4～2022.6)

2022年6月、第13期研究生(全18名)が、3年間の研修を修了しました。(報告は7～8面を参照)

2020～2021年度研究業務報告

①大谷派の近現代史

◆第32回平和展 「真宗大谷派の海外侵出—台湾開教—」

パンフレット2021年3月16日発行

*新型コロナウイルス感染拡大を考慮し、展示会は中止。

◆第33回平和展 「真宗大谷派の海外侵出—華北開教—」

パンフレット2022年3月18日発行

*新型コロナウイルス感染拡大を考慮し、展示会は中止。

②尾張の真宗史 *『研究報告』第13集参照

③現代社会と真宗教化 *『研究報告』第13集参照

編集・刊行

◆『真宗大谷派名古屋教区
教化センター 30年の歩み』

2021年7月21日発行

1990(平成2)年に設立され、「時代社会の要請に応える総合教化活動の推進」のため、様々な課題に取り組んできた30年を振り返り、記念誌としてまとめました。

◆『真宗大谷派名古屋教区教化センター
研究報告』第13集

2022年6月28日発行

第一部〈研究報告〉

旧陸軍歩兵第六連隊所属の軍人が編纂した「満洲」写真帳

—ソ満国境東寧などの在営の記録— 新野 和暢

「葬式仏教」の成立に関する覚書

—『改邪鈔』第十六条の歴史的背景— 小島 智

寺院の未来についての一考察

—仏事の変化と寺離れの背景について— 大河内 真慈

第二部〈講義録〉

真宗儀式の教相 得度式をめぐって

講 師 竹橋 太 氏(真宗大谷派儀式指導研究所 研究員)

教化資料 WEB配信

◆同朋の会 学習教材

『お寺でともに考えよう!』(全5回)

仏教に触れる中で湧いてくる素朴な疑問から学ぶことのできる教材を作成しました。同朋会などの学習の場でご活用ください。

第1回「仏教ってなんだろう?」 第2回「浄土真宗ってどんな教えなの?」
第3回「阿弥陀さまってどんな仏さまなの?」
第4回「お念仏ってなんだろう?」 第5回「なぜお参りするのだろうか?」

*「お東ネット」の資料ダウンロードページ内の「教化資料」ページよりPDFファイルをダウンロードし、印刷してご利用ください。

INFORMATION

◆2022年度聖典研修

テーマ 『『教行信証』『行巻』を読む—立教開宗の意義—』

講 師 梶原 敬一 氏(姫路第一病院小児科部長・真宗大谷派僧侶)

① 2022年11月10日(木) ② 2023年 1月20日(金)

③ 2023年 3月10日(金) ④ 2023年 5月12日(金)

【時間】 18時～20時 【会場】 名古屋別院 対面所

【聴講料】 500円

◆2022年度特別講座「真宗儀式の教相」

テーマ 「帰敬式をめぐって」

2022年12月1日(木)

講 師 竹橋 太 氏(真宗大谷派儀式指導研究所 研究員)

◆第14期研究生(2022.4～2025.3)

2022年4月より、第14期研究生(全10名)の研修が始まりました。

研修中は様々な先生の講義を受け、お互いの意見に耳を傾ける座談会を行います。また本廟奉仕団にも参加する予定です。



◆2022年度 第34回平和展

「大谷派の海外侵出—「満洲」開教(前編)」

【日 時】 2023年3月17日(金)～23日(木) 10時～18時

※初日は11時から開会式/最終日は17時から閉会式

【会 場】 名古屋教務所1階 議事堂 【入場料】 無 料

事務休暇 ・ 2022年12月29日(木)～2023年1月9日(月・祝)

図書整理 ・ 実施期間 2023年1月23日(月)～2月3日(金)

*期間中は書籍・視聴覚教材の貸出を停止させていただきます。また、館内での閲覧や机のご利用を、お控えいただきたく存じます。機材の貸出、長尺印刷のご依頼等は通常通り承ります。

*借り受け中の書籍・視聴覚教材は2023年1月20日(金)までにご返却をお願いいたします。

《雑感》

しばらく休刊しておりましたセンタージャーナルをお届けします。現況としては、事業を点検しつつ、これまでのセンターの歩みを振り返り、これからの方向性を試探しています。

取り組んできた課題を丁寧につないでいくこと。また、時代に応じた課題を聞き取り、動くこと。センターが人の世の問いに答えていく場として機能していくために、公議公論を進めていきたいと思っています。

(Y)

■教化センター

〈開館〉月～金 10:00～21:00

〈貸出〉書籍2週間 視聴覚1週間



教化センターSNS

■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ

【お東ネット】 <http://www.ohigashi.net>

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。